



広重版画より 三島 朝霧

第2365回例会

2023.9.28晴

司会 前田房江君

ロ-タリー-ソング 「日も風も星も」
指揮 小塚英樹君

会長挨拶 副会長 鈴木正二君

9月は母校明治大学の学生と交流する機会が多くありました。9月3日には富士市のロゼシアターで明治大学応援団の10日間の富士市での合宿の成果発表会がありました。応援団といっても二部一班という構成で、吹奏楽部56名、バトン・チアリーディング部75名、応援指導班18名、合計149名で成り立っているそうです。昔風の応援団の応援指導班にも女性が5名位いて、前・現・次応援団長は女性で、素晴らしい声と指揮でした。チア部は全員女性で若々しく華麗でした。団全体が青春をぶつける活動に感動を覚えました。9月16日には明治大学法学会夏季移動法律相談会が沼津商工会議所で開かれ、準備段階から沼津地域支部として応援をしてきました。校友会本部、県支部から宜しくと言われ学生からの連絡を待っていたのですが、7月になって具体化し、信用付けと広報手段として有力団体・企業の後援が欲しいということで、学生は伝手が無いので地域支部会員がアポを取り一緒に回って後援を取り付けました。校友の人脈の強さに感心しました。完全予約制で1件当たり相談・検討・回答で3時間くらい、教授陣やOBの弁護士もついてきて総勢40名で13件の相談を受け成功でした。相談内容は相続に関する相談が一番多く、次いで離婚だったそうです。コロナで3年間移動相談会はできなかったのが学生の経験者はおらず、記録しか行動がとれず後手後手になった感があります。コロナによる影響は経験の伝承というところにも影響を与えていることを再認識しました。学生達の懸命さと何とか成功させてあげたいとの地元の校友の思いがうまくマッチできました。2つの行事を通じて、自分も通ってきた道だけど青春って素晴らしいなと思いました。

出席報告

	出席総数	出席率	メ-ック	出席正率
前々回	40/52	76.92%	44/52	84.62%
今回	37/49	75.51%	会員総数	54名

欠席者 赤池君、加藤君、川名君、木村君、窪田君、佐野君、梶山君、諏訪部(照)君、橋本君、藤江君、森崎君、横溝君

幹事報告

会長 平出利之君

- 9月21日(土)1時~3時半イトーヨーカ堂にてポリオワクチン募金活動があります。ロータリーの白いジャンパー着用で参加をお願いします。
- 10月より清水英治さんSAA兼務します。

おめでとう

会員誕生日 芦川君、遠藤(眞)君
入会記念日 矢野君

スマイルボックス

◆栗原(達)君、近火お見舞いを頂きありがとうございました。被害は少なかったですが、消防車の数は多かったです。

卓 話

「たぶん、一生この街で暮らしていく」

杉崎亮慈君

ロータリーに入会して4年目ですが、題名「たぶん、一生この街で暮らしていく」という題名の元、自己紹介をさせていただきたいと思います。

自己紹介の前に

唐突ですが、、、

ある大先輩のSNSに女性にもてて、遊べるのは40歳程度まで、60になったら女性にも縁遠くなり、遊ぶ気力もなくなってきて、何か始めようにも60で始めるのはなかなか難しく、まだ若いうちから、趣味や人生において没頭できることを見つけることは、その後の人生を豊かにするという大切さが書いてありました。

みなさま、いかがでしょうか？ここにいる方は、60歳を過ぎても精力的でしょうから、もしかしたら違うかもしれませんが、当たらずと言えども遠からずというところでしょうか

それを聞いたからというわけではないですが、

趣味をもって、いくつものコミュニティで、多くの人と関わることが人生を豊かにすると感じました。

そんな中、この卓話のお話をいただいて、自己紹介をするにあたり、自分という人間は、何を大切に生きているのかを、今一度整理しなおしてみました。

私は、自分の会社とこの街が大好きです。たぶん一生このまちで今の仕事をしながら暮らしていきます。そして、私の街が好き、生活することにおいて、ロータリー活動を含めた地域活動をして街に関わるのが好きということです。その活動で出会った人たちと関わるのが好きということです。ちなみに私の街という概念は、三島市だけでなく近隣市町を含めた近隣地域全体です。

私のこの街が好き理由は、私の何回かある人生の転機の中の1回は、10年ほど前、地域団体への加入が素晴らしい転機を、もたらしてくれたからです。

大学を出て1年半過ぎたころの23歳で、父親がやっている(株)三島美装に、東京の製紙会社をやめて入社しました。

その後28歳で結婚したころは、専務取締役に、主として会社を切り盛りしていきました。

それから10年ほど懸命に仕事をしてきましたが、会社は、伸び悩み、仕事を増やして会社を大きく安心安全な経営するにはどうしたらいいかと思い悩みました。その悩みを少しずつ解決してくれたのは、地域団体である三島商工会議所青年部やNPO法人みしまびとという団体で出会った先輩や仲間たちからの教えがあったからです。

以前は、一番の指針は、先代の社長、私の唯一の上席である父親でした。いろいろなことを教わりました。業務的なことはもちろん、考え方や姿勢、外部との交流の仕方など、仕事の最中はもちろんのこと、お酒を飲み交わしながら話を聞き、吸収してきました。私は、父が好きでよくお客様と一緒に父親と飲みに行きました。晩年は相談しても、お前に任せるよ。今はお前の判断が一番だよということが、多くなり、その父親も3年前に亡くなり、学ぶべき場所はこういった団体に入り、先輩の話や仲間からの刺激だと感じています。

その地域団体から成長の機会をいくついただき、会社を運営するにあたっていろいろな概念を教えていただきました。私の指針になっている教えをひとつ紹介させていただきます。

それは、たらいの水の法則です。もしかすると皆さんよくご存じと思いますが、水を張ったたらいを想像してください。その水を自分の方へ寄せようすると、かえって反対側に行ってしまう。逆に反対側に水を寄せると自分の方に返ってくる。

このことから、自分に利を得ようとするほど、かえって結果的には相手の方に行ってしまう、自分には得をせず、相手に奉仕をする気持ちになって、相手に利を渡そうとすると、巡り巡って自分のためになる。

という教えです。このイズムは、青年部でも一緒だった、ここにいらっしゃるK先輩から、青年部の活動を通じて教わったものです。

まさしく、このロータリーの教えである職業奉仕の考え方と一致しているとも思います。

四つのテストの中の一つ、みんなのためになるかどうか。すごく心地よいフレーズですし、まずは、みんなである他者のことを考えるという、いわゆるたらいの理論だなおもっています。四つのテストは簡潔な中に深い意味を含ませた素晴らしい指針だと感じます

当たり前ですが、仕事をいただいた時には、お客様のためになるかどうかをまず考え提案する。当たりのことを当たりにやっていくことですが、難しいからこそ、教訓になっていると思います

私の転機の中の1回は地域活動からという話に戻ると

最初、三島商工会議所青年部という団体に、今から10年前の38歳の時に入会しました。最初は、どんなことをしている団体なのかもわからず、入会を推薦してくれた職員の方に、入ると仕事増えたりしますか？というくらい無知だったことを覚えています。

活動をしていると、だんだんと、その仲間たちとの過ごす時間が楽しくなり、この街が良くなるには、どうすればよいか、仲間がやりたいことや考えだしたことを気持ちよく応援するにはどういう関わりがいいか、本気になって夢中に行動していきました。自然とその仲間と仲良くなり、仕事ももらえるようになり、私も自然と仲間に仕事をしてもらいたくなってきました。

街が良くならなければ、私たちのような商売は衰退してしまいます。街が良くなれば、仕事生まれ雇用が生まれ、その結果私たちの商売もよくなると本気で信じるようになりました。

三島商工会議所青年部に入会するころは、従業員数も数人の社員と、あとはパートも含めて20名程度だったと思いますが、今は、社員30名程度、パートも含めて150名程度の組織に成長できました。

仕事をいただけるというのは、本当にありがたいことですが、仕事という直接的なことは、ゴルフのバーディをとった時のように神様からの贈り物のようなものと考えています。

もともと地域団体に入って有益だったことは、先輩や仲間から仕事を得る方法を教わったことです。

釣りで例えるなら、直接的に魚という仕事を得ることもありがたいことですが、上手な釣りの仕方、仕事の取り方を教わったということです。これが地域活動での先輩達との関わりにより得られる、本当の価値であると感じました。

周りは、思ったより、自分のことを見ていてくれて、気にかけてくれていて、自分自身がその団体で、できる限り精いっぱい活動して、その活動の様子を見れば、私を信頼してくれて、結果的に仕事をいただけるチャンスが増えるということを知りました。そうすると、自分の組織も、いただいた方に恥ずかしくないような仕事ができる組織にしないとなりませんし、より良いサービスを提供できる人間を育てていこう思い、会社にとっても良い好循環が生まれました。

地域活動を一生懸命やれば、それを感じてくれた方から、自然と仕事が発生し、だからこそまた地域活動ができるお金や時間という原資も生まれ、また、そこに熱を注ぎ地域が良くなるというたらいの水の理論がまさしく形成されていくのだと思います。

このロータリーにおいても、ほんとに多くの皆様からお仕事をいただいております、またいろいろなことを勉強させてもらい、感謝しかありません。本当にありがとうございます。

私のロータリーにおける推薦者(いわゆるスポンサー)のうちの一人である、ホテルS明館のM社長に誘われこのロータリーに加盟したのですが、M社長は、仕事と地域活動の良い出会いの中で地域内好循環を作り出し、自ら実践されて、後輩に地域活動の大切さを伝えている方でもあります。

ホテル建設、レストラン運営、リネンや客室整備、修繕工事などほとんどを地元の自分の信頼できる仲間任せにしています。ホテルですから地域外から獲得した資金を、地域内で循環させ、雇用と所得を同時に持続的に生み出すという素晴らしい構造を作り出しています。

ここに介在する一番の重要な点は、仲間への信頼ということです。私たち三島美装は、ホテルの運営実績は0でした。いくら清掃を生業にしても、ホテルの客室清掃は、私がラーメン屋を開業すると同じくらい異種であり、清掃でも、まったく別のノウハウが必要なことでもあります。

三島ではホテルの客室清掃ができるビルメンテナンス会社はなく、静岡市や首都圏の会社が三島に事業展開をしている会社のみでした。実績がある会社に発注すれば、難なく仕事をこなし、自分のリスクも少ないのは誰もが承知のことだと思いますが、実績もない私たちに発注いただけた理由は、地域活動で出会って、その活動に伴い信頼できると判断していただき、また、受けた側は、いわゆる下手こけない、失敗したくないという、絶対の信頼関係があると思い、その信頼関係の延長線上に、お互い街が好きにつながっているのだと思います。なんとかその信頼に報いて成功させようと、動いていた立ち上げ時が懐かしく思います

今では、実績もあるおかげで他のホテルも受注できるようになり、M社長の男気と地域愛に感謝しかありませんし、まさしく地域活動での出会いを、自分の経営にまで、地域への思いを組み入れており、その地域活動は、心躍る出会いがあり、それがいろいろな人に影響を与え、素晴らしい循環がおこっている街だと思っています。

だからこそ、そういった仲間と出会えるこの街が、私は大好きであります。

そういった中で、具体的に、今どのような活動をしているかと

いうと、私の多くの時間は、仕事以外では、主に地域活動が3つ、業界の団体活動が3つを中心に回っています。

一つは、もちろんロータリーです。昨年度は特に、IMや50周年という大きなイベントがありました。IMでは、コロナの影響があり、中止という選択肢もあった中で、責任者からやめるか、やるかの意見を問われたときに、作り上げてきたものをやりたいとみんなが発言したときに、この会に入ってよかったと感じました。違う意見があってもいいとは思いますが、事情によりかわられる範囲は違っても、仲間が同じ熱量で、自分事としてかわられる団体は、すごくいい団体だしいい仲間だなと思いました。IMでも50周年でも司会という大役をいただきましたが、当日の司会進行以上に、目的や過去の歴史、ロータリーの組織を理解して、関わったことは大きな経験になりました。

もう一つの地域活動は、NPO法人みしまびとという団体で、みしま未来研究所の運営を通じて、地域の未来をつくる人をつくるという目的の元、人をつくり成長させる活動しております。過去には感うという映画をつくり、ロータリーの皆様にもご協賛を含めて多くのご協力をいただいていたと思います。これも映画という手法を使って人を育てることを目的にしています。私もこの活動で育てられた一人です。

みしま未来研究所は、三島で地域活動をしたい人の入口のような施設で、やりたいことが広がり、チャレンジでき、いろいろな人に相談もでき、出会いが広がる施設です

出会いが広がる仕掛けとして、クラブビールを80種類以上おいているカフェバーを併設していますが、そのお店番が毎日

日替わりのボランティアという面白い仕組みです。私も一ヶ月に一度くらいお店番をしていますのでどうぞお立ち寄りください(場所、旧中央幼稚園)

このみしまびとの会員の構成も、すごくバラエティに富んでいて、学生、サラリーマン、経営者、公務員、音楽家、IT技術者、先生、警察官、研究者、デザイナー、建築士などなどいろいろな立場の方がいて、年齢も20歳から70歳まで幅広く、会員も女性の方が多いという本当に多様性のある組織です。経営者が集える組織は、商工会議所や、法人会、ライオンズやロータリーといったコミュニティはいろいろありますが、これだけ多様性のある人が集う組織があるというのは、三島ならではだと思います

三島には、移住したいという人が多くなってきたと思います。その方たちがまずは立ちよる施設であり、みしまびとのSNSなどの発信を見て興味をもったりする方が多いと実感でき、地域活動の入口を創造している団体で、楽しく活動しております。

偶然にも私の商売が、皆様から、直接的に仕事という魚をもらいやすい業態でありメリットを享受しやすいので、地域活動をやる理由付けもしやすいということもありますが、この地域が良くなり、この地域が好きになり、この街に住み続けたいと思う。この地域が発展し、その結果自分の会社の仕事も増え、雇用も増えていくことになれば幸せの連鎖だと感じています。

最後に、だからこそ、私の生活は、ほぼ仕事と地域活動と時々ゴルフであります。たぶん一生このまちで今の仕事をし、大好きな仲間と地域活動をしながら暮らしていきます。

ROTARY NEWS

世界中で活躍する「行動人」 2023年10月

米国

1世紀以上にわたって、ワシントン州で開催されるアップルブロッサムフェスティバルのグランドパレードはウェナッチ市の人気行事となってきました。ロデオクイーン、警察の白バイチーム、それに地元の名士を乗せたフロートに加えて、このパレードならではの目玉は何と馬の糞。特に「糞が落とされる地点」です。馬がパレードルートはどこで最初に糞をするかを当てる抽選会を、Wenatchee Sunriseロータリークラブは5月に開催。「糞のドロップ地点」を見事に当てた正解者は10,000米ドルのくじ引きに参加できます。外した人にも500ドルの残念賞が4口分用意されています。Haileyロータリークラブ(アイダホ州)のアイデアを借りたこの抽選会で、奨学金や、仮設住宅で暮らす世帯への寄贈品、それにファーマーズマーケットの改善のために14,000ドルを調達しました。同クラブの元会長であるキャスリン・マクノルティさんは次のように述べています。「このイベントをとても楽しいものにしてるのは、ユニークでちょっとふざけた抽選会です。抽選チケットの販売所では、ロータリーの素晴らしい活動について地域の方々とは気軽に話すことができます」

グアテマラ

Solvangロータリークラブ(カリフォルニア州)とEscuintlaロータリークラブ(グアテマラ)が協力し、ヌエバ・コンセプションという小さな町に安全な飲み水を届けました。2月に、Solvangロータリークラブ会員9人と会員の令嬢、それに第5240地区のほかのクラブに所属する会員がグアテマラ市の南西は車で約3時間のところにある農村を訪れました。同クラブの資金提供による6,000ドルの井戸の掘削を専門家たちと一緒に実施するためです。これに応じて、あるロータリアンによって創設されたリンダ・ビスタ財団がこの地域で2基目の井戸を創設することになっています。「びしょ濡れになるし、もう泥だらけ。きつい仕事です」と語るのはSolvangロータリークラブ元会長のリンダ・ジョハンセンさん。「でも、きれいな水が出てくるときは感動します」。訪問中、Escuintlaロータリークラブが企画した歯科検診でロータリアンの歯科医たちが50人の子供たちに無料で歯科診療を行いました。会員たちは衛生と栄養についてのレッスン開催を手伝い、工芸品プロジェクトを主導しました。

ドイツ

2021年7月の洪水により、北ヨーロッパでは数百人が犠牲となり、家屋が倒壊し、何世紀もの歴史がある建築物が浸水するという大災害が起こりました。被災地再建の支援でロータリアンたちは数百万ユーロを拠出したのです。そのほぼ2年後、ライン川の支流であるアー川沿いのロータリー会員たちは、アー川のことも魚のことも忘れていませんでした。Remagen-Sinzigロータリークラブ、Adenau-Nürburgringロータリークラブ、Bad Neuenahr-Ahrweilerロータリークラブ(いずれも第1810地区)は、3月に約1週間をかけて約16,200ドル分のサケを何千匹も放流。シュルトでは、Adenau-Nürburgringロータリークラブが魚の形をした焼き菓子を子どもたちのために作り、漁業の専門家がその日の作業について説明しました。「子どもたちを直接参加させることが非常に重要です」と、Adenau-Nürburgringロータリークラブ共同会長のアレックス・ショップさんは言います。「子どもたちは洪水災害の恐ろしさを体験しています。ですから、この地域の象徴であるアー川と良い関係を再構築することが非常に重要なのです」

イタリア

Morimondo Abbaziaロータリークラブは、毎年、創立メンバーの一人である故アンブロジオ・ロカテッリ氏を偲んで、慈善団体にメダルを贈呈しています。総員33名の同クラブは、3月に非営利団体「Rise Against Hunger」のイタリア事務所を受賞者に選びました。同団体と協力して、140人のロータリアン、その家族や友人、それにローターアクターを集めて、ジンバブエのある学校のために17,000食の食事を用意しました。ボランティアたちは米、大豆、乾燥野菜を分別して重量を量り、袋に詰め、地元の子どもたちによる絵やメモと一緒に箱詰めしました。かかった費用は約9,000ドルで、資金提供はロータリアンとロカテッリ家による、とクラブ会員であるダヴィデ・カルネヴァーリさんは説明します。



(週報担当: 町野 暉)